

＼＼ 特別座談会 ／／

「ちくま未来フェスタ」ができるまで。

イベント開催までの舞台裏を大公開!! 正副実行委員長とイベント運営をサポートする戦略会議のメンバーに、企画当初のエピソードや開催にかける想いを聞きました。

● 座談会参加者

- * 伊藤尚子さん(ちくま未来フェスタ実行委員長)
 - * 小山待子さん(ちくま未来フェスタ副実行委員長)
 - * 篠原哲哉さん(千曲市産業振興課)
 - * 小林啓利さん(千曲商工会議所)
-

ー 《ちくま未来フェスタ》をはじめたきっかけを教えてください。

伊藤尚子(以下、伊藤):直接のきっかけは《千曲市中心市街地活性化基本計画》(以下、中活計画)の内容を検討する会議に、私が千曲商工会議所の女性会として出席したことからですね。その時「市が中心になるのではなく、私たち市民発の企画で地域を活性化させることができないか?」という話をしたんです。最初は商工会議所の駐車場でフリーマーケットをするというアイデアもあったんですが、より公共的な空間の方がいいと思ったので、それだったら更埴文化会館(あんずホール)を使えないかと。

小林啓利:こうしたまちづくりの計画策定のために、市民のみなさんとワークショップをして計画書をつくるというのは他の自治体でもよくやっているんですが、我々の場合は特に「行動に移すこと」を意識していましたよね。その点、伊藤さんはこれまでにご自分でもフリーマーケットを企画・運営された経験もあったので、まずはとにかく形にしようって感じでした。



伊藤:そうですね。商工会議所の小林さんや千曲市産業振興課の方々には、当初からいろいろな相談に乗っていただいて。中活計画の推進役になっている《戦略会議》にも呼んでくださって、そこでは「まずは実行委員会を立ち上げた方がいいですよ」というアドバイスをいただいたんです。早速、この企画の趣旨に共感してくれそうな人を見定めながら、一人ひとり声をかけていったんで

すが……なんと、誰一人として断ることなく実行委員に加わってくれたんです！私はそれにとっても感動して……。実は、私が口火を切ってから開催まで実質2ヶ月しかなかったんですけど、それでも実現できたのは実行委員メンバーの想いやそれぞれのノウハウ、人脈を結集できたからこそだと思います。本当に感謝ですね。

篠原哲哉(以下、篠原):まちづくりの取り組みに関しては、行政側が一方的に進めるのではなく、市民のみなさんが自ら手を挙げてくださったことを我々がサポートする方がうまくいくんです。《ちくま未来フェスタ》の実施にあたって、助成金制度のご紹介などもしましたが、最終的にはご自分たちで協賛金を集めて運営するというのはすごいことですよ。

ー 伊藤さんの真っ直ぐな想いに共感しつつ、それぞれにスキルを持ったみなさんが集まったんですね。副実行委員長の小山さんをはじめ、実行委員にはどんな方が集まったんでしょう？

小山待子(以下、小山):私は普段は《シーバス・スポーツクラブ》で企画の仕事をしているのですが、そこからの出向という形で関わっています。子育て家庭にも深く関わっている会社の特性を活かしながら、《ちくま未来フェスタ》では伊藤と一緒にイベント全体の企画や協賛集め、子どもたちが主役になれるようなステージ発表の企画もしています。私の他にも会計や広報の担当などがいるのですが、営業は委員全員ですね。篠原さんたち市職員の方はオブザーバー扱いではありませんが、前日準備から当日の運営までとてもよく動いてくださってありがたいです。



伊藤:基本的には、みんな無償で動いています。ただ、代わりにとってはなんですが、このイベントをきっかけに新しい取り組みが生まれたり、誰かの仕事につながればいいですね。例えば、イベントのオープニングセレモニー時にドローンを使って集合写真を撮影したんですが、それも委員の一人である富岡くん(富岡写真館)が仕事でドローンを扱い始めていたからなんです。企画に関わる理由はそれぞれだとしても、結果として関わってくれている人のメリットになれば嬉しいですね。

篠原:そもそも中活計画では、駅前通り商店街をはじめとした地域経済の活性化も見据えています。この企画も「市民のお祭りをやって、地域を賑やかす」というだけでなく、そうした地元企業のPRの場になっているのがいいところだと思います。

ー 実際にイベントにもお邪魔したんですが、核となる実行委員以外にも多くの市民の方が関わって一つのイベントをつくりあげていた印象があります。

伊藤: 地元を巻き込んでいきたいというのが一番ですね。会場に設置した看板ひとつとっても、1回目は埴生中学校の美術部と《ママフェス》の中村さんが、今回は戸倉上山田中学校の美術部と《自然保育ぼっこ》のみなさんが描いてくれました。他にも屋代南高校の生徒さんにはファッションショーもやってもらったし……ここがいろんな人の発表や交流の場になることで、公共施設の利用についての市民の関心も高まるだろうし、様々な場面で力を貸していただけるが増えるんじゃないかと思います。私は性格的に大雑把な部分もあるけど、そこは周りのみなさんが助けてくださるので安心しているというか……(笑)



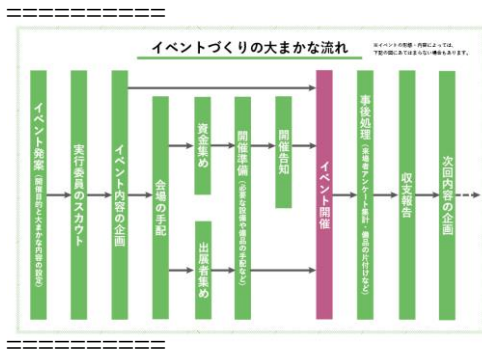
小山: 今回は「いろんな体験をしてみよう」という開催テーマにもとづいて、企業や団体のみなさんと出店内容を詰めていきました。いずれは、これを経験した子どもたちが成長した時「この就活情報に載ってるこの企業、そういえばあのイベントに出ていたっけ……」と、地域に帰ってくるきっかけになれば嬉しいですね。まさに千曲市の未来をつくるお祭りになればと思っています。

伊藤: 《ちくま未来フェスタ》って名前も自然と出てきたんだよね。それと、今回から中学生になる私の孫や、その友達もボランティアとして関わってくれたんです。普段、家で見せているものとは違った顔が見られたのも嬉しかったですよ。今後もこうして関わってくれる学生が増えてくれるといいですね。きっと学校側もこうした地域との関われる機会を望んでいるんじゃないでしょうか。いろんな地域の人と関わりながら、みんなで子どもたちを育てていくことにつながるんじゃないかと思うんです。

ー 当日までのスケジュールや予算の組み方など、イベントができるまでのポイントを教えていただけませんか？

篠原: 1回目は超短期間で突っ走ったから、あまり参考にならないかもしれないけど……2回目は、開催の約10ヶ月前には打ち合わせはしていたと思います。

小山: その頃は開催テーマも決まっていたね。秋にかけて体験ブースを出店していただく企業回りをはじめ、協賛募集は年明けくらいでしたかね。広報面では、チラシを3月末と開催直前の2回に分けて制作・配布したり、《monami》などの子育て情報誌にも取り上げていただいたりしました。



篠原:こうした公共施設を使ったイベント開催にあたっては、とにかく使用予約を入れることが重要だと思います。定期演奏会など、毎年決まった時期に会場が押さえられてしまっていることが多いんですよ。それに先に使用日の予約をしてしまえば、その日に向かって準備を進めていくこともできます。また、運営資金の話をしると、収入は主に協賛金と出店料。支出はほとんど広報費ですね。あとは、運営スタッフのお弁当代や事務用品費などですか。

ー なるほど……準備には約1年ほど、じっくり時間を取っているんですね。ちなみに、来場者からは開催頻度を増やしてほしいという声はありませんか？

伊藤:おかげさまで、2日間にしてほしいとか、年に2回開催してほしいというお声もいただきます。でも、今のところは年1回の開催にすべてのエネルギーを注ごうという話を実行委員内でしていますね。

小山:そうですね。現状では、今くらいの規模がちょうどいいと思います。拡大したところで、ちゃんと私たちの手が行き届くものにできるか分からないですし……例えば、私たちが年2回やるのではなく、参加してくださった企業や団体みなさんが自主的にイベントを立ち上げてほしいと思うんです。そうして市の公共施設を上手に活用する事例が増えれば、千曲市はもっと楽しくなるんじゃないでしょうか。



ー 最後に《ちくま未来フェスタ》の課題や今後の展望についてお聞かせください。

小山:これだけ行政や商工会議所さんがサポートしてくださっていても、継続にあたって一番の基盤になるのはやはり「資金」と「人脈」だと思います。それをいかにキープしていくかは今後の課題ですね。私たち以外にも、こうしたイベント企画を考えている方は運営資金の面でつまづいてし

まうことも多いと思います。その点では、今の《ちくま未来フェスタ》はひとつのお手本になれるかもしれません。あと、個人的には、いい意味でこのイベントを利用する方がもっと増えていけばと思います。イベントに参加することが認知度アップにつながり、学校なら受験者が、企業なら入社希望者が増えることにつながっていけばと思うとウキウキします。

伊藤:今回も運営費用に多少の余剰金が出たので、これを使って市内の保育園に目録を贈呈しようと考えています。ただ、一度にすべての保育園に差し上げるほどはないので、毎年2カ所ずつなどになってしまうかもしれません。だから、市内すべての保育園に贈呈が終わるまではイベントも続けたいですね。あくまでも中心市街地活性化の土台の上に成り立っている企画なので、ここで生まれたものはできるだけ地域に還元していきたいんです。そしてなにより《ちくま未来フェスタ》の運営を通して感じたのは、「人」の大切さですね。これまでに自分が関わってきた方々がここぞというときに動いてくださるのは、ほんとうにありがたい。今後も市民のみなさんを巻き込みながら、地域から必要とされるイベントになっていければと考えています。

